

## 1. 序

山田孝雄は『平安朝文法史』(1952)の中で「る・らる」の「能力をあらはす」用例について、「この際には打消の形のみ見ゆ」と書いており、助動詞「る・らる」の可能的場合の、打ち消し表現に関する非対称性は広く知られている。

では可能以外の用例ではどうだろう。もし受身・自発・尊敬でも、打ち消し表現を下に接続させる割合が高いなら、この特徴は「る・らる」全体の特徴ということになってしまう。しかし、受身・自発・尊敬で、打ち消し表現を下に接続させる割合と肯定表現を下に接続させる割合が拮抗しているなら、この非対象性は可能特有のものだといえる。

そこで、現代語の「れる・られる」の受身の用例で、打ち消し表現を下に接続させる割合を調査した。

## 2. 用例の採集対象

用例を採集する対象は、物語や論説など文体によるバイアスがかかるのを避けるため、文芸系総合雑誌とする。また、今後通事的に「れる・られる」の打ち消しを接続させる状況の変化を調査するため、できるだけ創刊号が古い雑誌として「新潮」を選んだ。今回は「新潮」2008年6月号を対象とする。

文章中の引用部分に現れる用例、および広告に現れる用例は、書かれた時期が特定できないため取らない。

## 3. 「受身」

用例のうちどれが受身の例なのかを決定するのは難しい。自発と連続した部分を持つからである。本論では、「れる・られる」を含む文節の主体にあたるものと、「れる・られる」に上接する動詞の動作主が明確に異なるものを「受身」として調査対象とした。例えば

- (1) 秋幸は浜村龍造に誘われ、「六さん」に会いに行くという口実で山に分け入る。(「関係の化学としての文学」齋藤環〔論説〕P.290)

では、「誘われ」たのは「秋幸」であり、「誘った」のは「浜村龍造」である。「れる・られる」を含む文節の主体と、上接する動詞の動作主が異なっている。この定義にあたるものを本論では「」をつけて、「受身」と表記する。

「受身」のうち「～ニ」「～カラ」「～ニヨッテ」などが明示されている用例には次のようなものがあった。

- (2) 男がすこしずつ思い出すようになったのも、老妻に先立たれた後のことになる。(「生垣の女たち」古井由吉〔物語〕P.51)
- (3) 次郎長一家では、石松が親分から讃岐の金比羅へ刀を奉納してきてくれと言われ、仲間たち相手に腹を立てている。(「マキノ雅弘」山根貞男〔論説〕P.273)
- (4) けれども、美術批評という難題にながく頭を悩まされて来た身としては、本書を読む上で最大の関心事は、齋藤氏が美術についての批評を手がけるうえで、前記の問題をどのように捉えているかということにあった。(「境界線上に居るのは誰か」榎木野衣〔随筆〕P.211)
- (5) これらの製紙工場によって、それらの樹林、森林資源はすべて次々に伐採され、紙になって消尽されてしまった。(「サハリンへ 宮沢賢治の足跡を追いながら」大沢退二郎〔随筆〕P.137)

(2)では「先立たれた」のは「男」であり、「先立った」のは「老妻」なので、「先立たれた(先立たれる)」という文節の主体と、上接する動詞「先立た(先立つ)」の動作主は異なっている。(3)、(4)、(5)も同様である。

「～ニ」「～カラ」「～ニヨッテ」などが明示されていない用例には次のようなものがあった。

- (6) 最中のとなりに温泉饅頭もならんでいて、よくみるとその表面にも踊子らしき人物像の焼印がおされ

ているので、これも買ってたべてみた。(「いはねばこそあれ」丹尾安典〔論説〕P.228)

(7) 食べなくなったら眠っても母に会わず、父そのものである意識は明確になって頭にずっしりと根を張り、いきいきとしながら凝り、やがて額が尖りながら迫り出すのを感じ、先端が槍になって土を裂き、力を与えられたような気がして上を見ると、角が輝いていた。(「蛹」田中慎弥〔物語〕P.106)(主人公はカブト虫の蛹)

(8) 読み始めると私は、ボルヘスにインスパイアされた独特の作風で知られる、星野美智子のリトグラフを思い浮かべていた。(「シェラザードの語り」野谷文昭〔随筆〕P.216)

(6)は、焼印をおされたのは「(饅頭の)表面」である。焼印をおしたのは、「工場の人」または「機械」など何とは断言できないが、「(饅頭の)表面」ではないとは言える。「おされて(おされる)」の主体と「おさ(おす)」の動作主が異なっている。(7)も、力を「与えられた」のは「私」であるが、「与えた」のは「私」ではないと言える。(8)も、「知られる」のは「星野美智子のリトグラフ」であるが、「知る」のは「人々」などであり、異なると言える。

当該雑誌には「れる・られる」の用例は1798例あり、このうち「受身」の用例は1550例あった。

「受身」に該当しないものには、まず尊敬の用例(上記の主体と動作主が一致するもので、敬意の対象があるものとする)がある。

(9) 石井桃子さんは、その生涯に、おそらく何万通もの手紙や葉書を書かれた。(「硬い殻の中の、朱い実」尾崎真理子〔随筆〕P.122)

(10)「(前略)私自身は、朝がた脱走した寮生のご両親がお詫びに来られたり、護持会の来客があったりで、どちらも出ておりませんが、その間末永君はずっと僧堂にいたと承知しております。(後略)」(「太陽を曳く馬」高村薫〔物語〕P.351)

(9)は、「書かれた」(お書きになった)主体は「石井桃子さん」であり、「書か(書く)」の動作主も「石井桃子さん」であり、「書かれた」の主体と「書く」の動作主が一致している。また、敬意の対象は「石井桃子さん」である。(10)は「来られ」たのは「ご両親」であり、「来」たのも「ご両親」であり、「来られたり(来られる)」の主体と「来(来る)」の動作主が一致している。また敬意の対象は「ご両親」である。

次に、可能の用例(上記の主体と動作主が一致するもので、「~することができる」に言い換えられるものとする)がある。

(11) 艦橋<sup>ブリッジ</sup>に立ち、海を見詰めているぶんには、艦の内部で起こりつつある出来事から眼を背けていられる。(「カデナ」池澤夏樹〔物語〕P.372)

(12) 闘って生きているからこそ、だらしく死んだ植物を食べる立場にいられた。自分は強いのだ。(「蛹」田中慎弥〔物語〕P.108)

(13) 大家さんがわたしたちに親切にしてくれるのは、どうしてだか、わかる、とある夜、女はたずねた。男が答えられずにいると、それはわたしたちのことを、間違いをした男女と、見ているからなのと言う。(「生垣の女たち」吉井由吉〔物語〕P.40)

(14) 体が回復してくると、院内で行われる断酒セミナーでの依存症についての学習や、院内断酒会への参加が治療の内容となった。もしも一人だったらとても耐えられなかっただろう。(「ばかもの」<sup>いとやま</sup>絲山明子〔物語〕P.311)

(11)は「眼を背けていることができる」のは「私」であり、「眼を背けている」のも私なので、「いられる」の主体と「いる」の動作主が一致している。(12)も「食べる立場にいられた」のは「私」であり、「食べる立場にいた」のも「私」であり、「いられた(いられる)」の主体と、「いた(いる)」の動作主が一致している。(13)、(14)も同様である。

また、自発(上記の主体と動作主が一致するもので、「自然と~する」と言い換えられるものとする)の用例がある。

(15) 日頃軽蔑してやまぬ感激家の空疎な文句そのままの言葉が次から次へ己の口から飛び出るのを宇津

木大尉は呆然と眺めやり、しかし、それらの言葉は空疎であればあるほど激発に油を注ぐように思われた。

(「神器 浪漫的な航海の記録」奥泉光〔物語〕P.377)

(16) その人の、このお店をなんとか軌道にのせなきゃいけないから、アマゾンというネットの本屋さんがありますが、あの会社のトレード・マークみたいな引きつった笑みの口元で必死に客に愛想を振りまいているといった様子が、ちょっと鬱陶しくて逆効果だと、私には思われましたが、同時に、そんなふうに逆効果なのはきっと私に対してくらいのもだから、そのままがんばってほしいとも考えてもいました。

(「楽観的な方のケース」岡田利規〔物語〕P.7)

(15) では、「自然と思った」のは「宇津木大尉」であり、「思った」のも「宇津木大尉」で、「思われた(思われる)」の主体と、「思わ(思う)」の動作主が一致している。(16)は「様子が」に着目して、「{様子ガ}{私二(八)}逆効果だと{思われル}」という構造で見ると受身ということになる(仁田1997では、従来の「自発」を「自発的受身」として、受身の下位分類に入れることを提案している)が、本論では「{私二(八)}{様子ガ逆効果だと}{思われル}」という構造とみて、従来通り「自発」は「自発」として取る。すると「自然と逆効果だと思ふ」主体は「私」、「思わ(思う)」の動作主も「私」であり、「思われる」の主体と「思う」の動作主が一致している。

また、主体と動作主が一致している用例の中でも、

(17) (前略) 医学者の道を堅実に歩みながら、小説家志望を捨て切れない小暮悠太といふ名の人物が、作者自身の面影を色濃く宿してゐる事も容易に想像がつく。緻密に組み立てられた作品のあちこちに、作者の生なましい息遣いが感じられる部分があって、読者を寛がせる。(「交錯する人々の声」高井有一〔随筆〕P.212)

のように「感じるができる」とも「自然と感じる」とも取れ、自発とも可能とも決定できない用例もあった。

川村(2004)は「太郎の好意が嬉しく感じられた。」という用例が、自発なのか、可能のうちの意図成就なのかについて、「背後に行為者の意図を読み取るか否かの微妙な差となる。」と述べ、どちらと取るかの判断をさけている。(17)はまさに、背後に行為者(筆者)の意図を、読者が読み取るかどうかという微妙な差になっている。

『日本文法講座6 日本文法辞典』(1958)は「可能の助動詞」の項目で自発について「自然可能ともよばれる」として、「この写真でも、きみのかつてのやんちゃぶりは想像されるよ。」という例が、『この写真によって想像することができる』の意にも、『この写真を見ていると、なんとなく想像が浮かんでくる』の意にも考えられるとして、自発と可能の連続性を指摘している。

こういった用例は無理に「自発」とも「可能」とも決定せず、調査対象から外した。後述の表では仮に「自発/可能」と表記した。

(18) 『舞姫』に次ぐ『うたかたの記』(一九八〇年八月)に看取されるのも同じ厳しさであるが、この作品ではさらに、主題とじかにかかわる組成の骨格が、ありようをいっそう水際だったものになっている。

(「日本小説技術史」渡辺直己〔論説〕P.195)

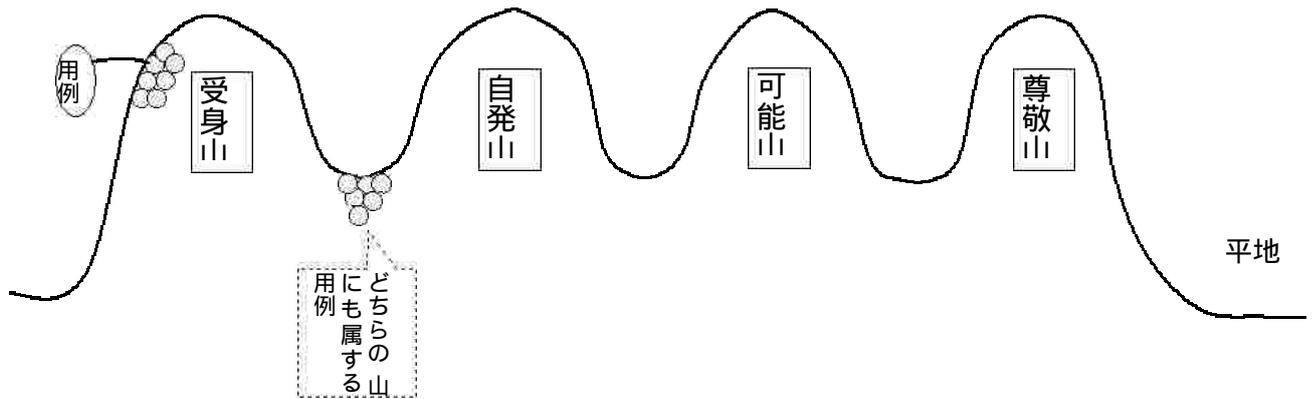
では、「看取される」の主体と「看取する」の動作主が異なっているかどうかを判断することができない。「看取される」が「の」に連体しているため、主体と動作主が異なっていると取る方が適切ではないかと思うが、判断は避けたい。こうした自発とも受身とも取れる用例は調査対象から外し、「自発/受身」と表記した。ただし、このような用例は、多く可能の意味も含んでいる点も指摘できる。

寺村(1982)は「思う、感ズル、想像サレルなどの思考動詞の受身形が、受身、可能、自発のいずれの意味が分別しがたい」ことについて述べ、また「すべての分類、特に下位分類には、分類の境界線に接する地域の、他類との類似性、連続している部分の両面的性格の問題がつきものである。」という。

川村(2004)は、「ラレル形の多義の構造や格体制のあり方などを説明する方法」について「どのような説

明方法を見つけ出すかはわれわれの今後の課題であろう」という。

私は「れる・られる」の意味の分布を次のようなイメージ図で捉える。



意味の決定できない用例は、「自発」を規定する方法、「可能」を規定する方法を明確にできるまで、仮に「自発/可能」「自発/受身」としておく。

#### 4. 結果

	「受身」	自発	可能	尊敬	自発/可能	自発/受身
肯定	1498	64	41	49	24	8
打ち消し	38	1	52	0	6	0
形肯定意味打ち消し	9	0	1	0	0	0
形打ち消し意味肯定	5	1	1	0	0	0

「受身」1550例のうち、打ち消し表現を下接するものは43例で、現代日本語の「受身」の助動詞は打ち消し表現を下接しにくいといえる。

ただし、そのうち5例は

(19) そして、歴史は社会学に基づいてかかれなければならないのである以上、結局社会学こそ愛国心振興のために日本が緊急に必要とする方策なのだと有賀は結論する。(「明治の表象空間(二十五)」松浦寿輝〔論説〕P.307)

というように、打ち消し表現を直接は下接しつつ全体の意味は肯定になるもの(表では「形打ち消し意味肯定」と表記)であった。逆に「形肯定意味打ち消し」とは、

(20) 分譲地としてきちんと整備されていない!、はなから見捨てられたままの雉の通り道になっているような荒れ方が、逆に私の心をそそったのだった。(「海松」稲葉真弓〔物語〕P.87)

のように、直接は肯定表現を下接しつつ全体の意味は打ち消しになっているもので、9例あった。

また、「受身」に打ち消しが下接されている用例も

(21) この作品は、これまであまり論じられる機会に恵まれなかった。(「関係の化学としての文学」斉藤環〔論説〕P.283)

など、特に日本語として齟齬がある訳ではない。

「ラレル形の多義の構造」を説明する方法を見つけるという課題に対して、「打ち消し表現を下接させるかどうか」は一つの視点にならないだろうか。

#### 5. 今後の課題

古い年号の「新潮」と、「受身」が打ち消し表現を下接する割合を較べる。その際、用例を「自発」と規定する指標、「可能」と規定する指標を明確にし、それと今回の2008年6月号での態度とを一致させる。

「自発/受身」とした用例。

- ・ 周知の名作ゆえ、荒筋や前後の状況などについて他言は無用かとおもうが、たとえば、第二篇に読まれる昇との「絶交」場面。（「日本小説技術史」渡辺直己〔論説〕P.171）
- ・ 『浮雲』の三人称多元性に看取されるのは、文字通り画期的な達成であり、少なく見積もって当時におき抜群無類の、ことによると現代にあってなお参照にあたいしうるその技術的水準に比べるなら、作品冒頭の語り口をはじめ、とりわけ第一篇に集中する特徴として巷間しきりと指呼される「戯作調」など、ほとんど取るにもたらない。（「日本小説技術史」渡辺直己〔論説〕P.175）
- ・ 冒頭と結末にやや凝った枠を設けた「自叙体」小説として読まれる嵯峨の屋おむろ『無味気』（同右）は、末段近く、破門され洋行の途に就かんとしてかなわぬくだりに、同手法を活用している。（「日本小説技術史」渡辺直己〔論説〕P.199）
- ・ 見られるとおり、いい歳をした男たちが泣きに泣く。男泣きの光景は凶状旅の暗鬱さを受けているわけだが、あまりにも執拗で、見る者を唾然とさせずにはおかない。（「マキノ雅弘」山根貞男〔論説〕P.277）
- ・ 見られるとおり、両人の言葉と態度は屈曲を重ねて進み、これまで随所で強調したマキノ雅弘独特の台詞術ないしドラマづくりが最高潮に達していると思われる。（「マキノ雅弘」山根貞男〔論説〕P.277）
- ・ 見られるとおり、第九部は大部分が第八部のラストを受け継ぐ内容で、マキノ雅弘は、撮るなら石松の敵討の話に、と自ら書いたのであろう。（「マキノ雅弘」山根貞男〔論説〕P.281）
- ・ 見られる通り、「社会学ノ理論上ノ要用」において示されたシステム論的思考が、その「實際上ノ要用」の議論に至るや不意に掻き消え、情緒的な家族愛の比喻が導入され、学問はナショナリズムを涵養する実験的な教育装置へと矮小化されてしまう。（「明治の表象空間（二十五）」松浦寿輝〔論説〕P.307）

#### 参考文献

- 岩淵匡「『(ら)れる』・『(さ)せる』の意味の関係について」『講座日本語教育第9分冊』早稲田大学語学教育研究所 1971年7月1日
- 小川譽子美「受身文と自発文の連続性に関する考察 関与者無表記の受身文をめぐる」『横浜国立大学留学生センター紀要』1998年（年刊）
- 金澤庄三郎『日本文法新論』早稲田大学出版部 1914年12月28日
- 川村大「受身・自発・可能・尊敬 動詞ラレル形の世界」『朝倉日本語講座6 文法』朝倉書店 2004年6月25日
- 辛島美絵「『る・らる』の尊敬用法の発生と展開 古文書他の用例から」『国語学』1993年3月
- 峰岸明「自発・可能・受身・尊敬・使役」『解釈と鑑賞』1968年10月
- 齋藤章「非意志にあらざるものは意志にはあらず 不可能用法の『る』『らる』をめぐる『自発』と『可能』」『山梨大学国語・国文と国語教育』1988年3月
- 渋谷勝己「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』1993年2月
- 辛昭静「『ら抜き言葉』の使用率に影響する言語内的要因と外的要因」『計量国語学』2003年9月
- 申鉉竣「近代日本語における可能表現の動向に関する研究」絢文社 2003年2月17日
- 杉本和之「現代語における『自発』の位相」『日本語教育』1988年11月
- 卓星淑「『れる・られる』の『非情の受身』の用法について」『人間文化研究年報』1999年3月
- 田口聖子「日本語の可能・自発表現と否定形式との意味的關係」『同志社女子大学大学院文学研究紀要』2001年3月

竹田美喜「『自発』と『可能』の連続・非連続性についての試論」『愛媛国文研究』1974年12月

張威<sup>ZHANG Wei</sup>「結果可能表現における否定の特異性」『国際関係学部紀要』1996年10月

寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版1982年11月10日

中西宇一<sup>ういち</sup>「自発と可能 「る」「らる」の場合」『女子大國文』1978年6月

仁田義雄<sup>にっただよしあ</sup>「自発的受身」『日本語研究』1997年4月

(仁田1997では自発的受身を「その高麗犬のような顔を見ていると、なぜともなく死んだ父の顔が思い出されてきた」というような契機性自発と、「約束どおり電話は夕食どきにかかって来た。思いなしかいささか沈んだ声であったので話の中身ははなから予想された。」というような論理性自発に分けて考察し、前者は「否定形」を取れないが後者は「否定形」を取れると述べている。)

橋本進吉『助詞助動詞の研究』岩波書店1969年11月29日

日野資純<sup>すけずみ</sup>「青森方言管見」『国語学』1958年9月

三上章『現代語法序説』くろしお出版1972年4月20日(1953年6月20日刀江書院発行の『現代語法序説』の復刊)

森山卓郎『日本語動詞述語文の位相』明治書院1988年3月23日

山田孝雄『日本文法論』寶文館1940年9月15日

山田孝雄『平安朝文法史』寶文館1952年1月10日

山田孝雄『平家物語の語法 下』寶文館1954年12月15日

吉井健「平安時代における可能・不可能の不均衡の問題をめぐって」『文林』2002年3月

『日本文法講座6 日本文法辞典』明治書院1958年5月25日発行

hamayufu@gmail.com